

の寄贈を受けた錦絵が含まれている。昭和59年に発刊された『日本大学医学部図書館古医学資料目録』の編纂に当たった酒井シヅ教授は、本書の「発刊によせて」で内山孝一、石原明の両氏がコレクションの収蔵に大きく関与されたと考えたとしている。宮川美知子氏はすでに『醫の散歩道』（非売品）として上記連載を4冊上梓しているという。今回、図、文を加えて本書がカラー版の大変読みやすい醫の古典の紹介書として発刊されたものである。医史学をまなぶ人に有用となることを期待して章立てを紹介する。なおこれらの資料へのアクセスは日本大学医学部図書館への連絡により申し込み書類の提出後許可をうけて可能となることを確認しております。

第1章 古代の医学・医療

1. 古代ギリシャ
2. 古代中国

第2章 中世の医学・医療

1. 日本
2. 中国
3. 朝鮮
4. 西洋

第3章 近世の医学・医療

1. 西洋医学の伝来
2. 江戸前期・後世方
3. 江戸中期・古医方

4. 江戸後期・折衷派
5. 江戸の外科医術
6. 幕末の蘭方と漢方

第4章 医学の進歩と江戸庶民の健康意識

1. からだの仕組み
2. くすり
3. 民間の健康法
4. 天然痘
5. 麻しん
6. 出産
7. 江戸の医療と風俗
8. 番外編

第5章 近代の医学・医療

1. 西洋医学教育を導入
2. 幕末から明治へ

第6章 近代から現代の医学へ

1. 日本
2. 海外

なお巻末には参考文献と本文にかかわる年表が掲載されている。豊富な図版の楽しい一書である。一読すると原資料にあたりたいという気持ちを禁じえなくなる解説がついており紹介します。

(渡部 幹夫)

[人間と歴史社, 〒101-0052 千代田区神田小川町26, TEL. 03 (5282) 7181, 2017年6月, A5判, 287頁, 2,500円+税]

森川 潤 著

『青木周蔵——渡独前の修学歴——』

1891（明治24）年、来日中のロシア皇太子（のちのニコライ2世）が斬りつけられ負傷した「大津事件」の際、外務大臣だったのが青木周蔵（1844-1914）である。1868（慶應4）年長州藩留学生としてドイツに留学、1873（明治6）年の外務省入省後も、長らく駐独公使を務めた。大津事件により外相辞任を余儀なくされたが、その後も欧米列強との条約改正交渉に深く関わったことで、明治外交史に名を残している人物である。

その青木周蔵は、現在の山口県南西部、旧・厚狭郡の地下医（民間医）三浦家に生まれ、蘭方医として名高い青木周弼の弟・研蔵の養子となった。本書は、青木周蔵の外交官としての事績ではなく、ドイツ留学前、医家の後継者として彼がどのような修学履歴を経たのか、どのような人的な繋がりのもとで彼が自己形成していったのかについての詳細な研究である。以下に目次を掲げておこう。

第一章 読み書きの学習時代

第一節 地下医三浦玄仲

第二節 寺子屋

第三節 種痘医玄仲

第二章 漢学の修業時代

第一節 郷学菁莪堂

第二節 中津誠求堂

第三節 福沢諭吉との邂逅

第三章 蘭学の修業時代

第一節 能美隆庵の学僕

第二節 好生堂医生

第三節 長崎遊学の藩命

第四章 長崎時代

第一節 野稿一章

第二節 修学

第三節 亨魯西行

補章 長崎のドイツ医学

第一節 原典主義と翻訳主義

第二節 オランダ人教師

第三節 ドイツ医学

長州藩における医師制度、教育制度やその内容(漢学・蘭学の双方)、キャリア形成のあり方、中津や長崎における修学環境、幕末維新期における藩や身分を越えた人びとの交流・交渉の様相などが、未開拓だった一次史料を含むさまざまな史料にもとづいてあとづけられている。青木はドイツ留学後、ベルリン大学の医科ではなく法科に入学することになるが、医家の後継者であるがゆえに享受しえた留学前の修学環境が、彼の知的基盤の形成に大きく寄与していたことは間違いないだろう。幕末から明治にかけて、「西洋」の知の導入・解釈が至上命題となった時代に、その担い手となった医家出身者の重要な事例として興味深い。

(永島 剛)

[丸善出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17, TEL. 03(3512)3256, 2018年6月, A5判, 326頁, 定価5,400円+税]